

北タイ班

タイ北部のヤオ（ミエン）族の山村におけるブタ飼育  
- ブタの特徴とその生殖管理について -

増野高司（総合研究大学院大学先導科学研究科）

キーワード：ブタ飼育，ヤオ族，飼料，供犠，生殖管理，去勢  
調査期間：2005 年 2 月～ 5 月，6 月～ 12 月，2006 年 1 月，3 月  
場所：パヤオ県チェンカム郡パーデン村

Pig husbandry at the Yao hillside village, Northern Thailand  
: Characteristic of native pig and reproductive control

Takashi MASUNO (Grad. Univ. Advanced Studies, Department of Biosystems Science)

Keywords: Pig husbandry, Yao, animal feed, reproductive control, castration  
Research period: 2005, Feb-May, Jun-Dec, 2006, Jan and Mar.  
Research site: Chiangkham district, Phayao province

## 要旨

本報告はタイ北部に位置するヤオ族の山村におけるブタ飼育について、村で飼育されているブタの特徴そしてブタの育成および生殖管理について報告することを目的とした。結果は以下のとおりである。

調査村で飼育されているブタは体色が黒いことそして耳の形状および乳頭数から、この地域の「在来種」と考えられる小耳系のブタの特徴を残した黒ブタである。この黒ブタは基本的には村内での自家繁殖によって生産されているが、他民族からの購入なども確認され、特に調査村やヤオ族の間に特有の品種が維持されているものではない。

調査村では 20 戸のうち 18 戸が合計で 163 頭のブタを飼育している。村内の 7 戸が少数の母ブタを残して、多数の去勢オスの飼育をおこなう飼育戦略をとっている。調査村ではブタを増殖させることは容易なことであると認識されており、去勢オスを利用していかにブタの繁殖を抑制するかが重要であると考えられている。ブタはブタ小屋の中で舎飼いされている。ブタの餌として主に米ぬかとバナナの茎を刻んだものを混ぜ合わせたものが利用され、配合飼料は基本的に利用されない。

村で飼育されている雄ブタ 105 頭のうち未去勢のブタは 5 頭のみで、その他の 100 頭の雄ブタは去勢済みだった。ブタの生殖は種ブタとして利用されるごく少数の未去勢の雄ブタを残し、その他の雄ブタを全て去勢することで管理されている。村では 19 名がブタの去勢技術を持っており、このうち 9 名が女性であった。村の各家が種ブタを飼育しているわけではない。このため村では種ブタの貸借がおこなわれている。ブタの貸し出しは親族関係に限らず村内で広くおこなわれている。

## 1. はじめに

ブタは、土着のイノシシを馴化して家畜としたものであるといわれる。ブタは世界各地で家畜として飼育され、現在世界には約 200 種のブタの品種が知られている。東南アジアの島嶼地域から南アジアおよび中国チベット高原などの僻地では、その土地で長い間飼われてきた、いわゆる「在来種」と呼ばれる小耳系のブタが飼育され

ている [黒澤 2000:27]。このようにブタには多種多様な品種がみられることから、村で飼育されているブタに関しては、形態的特徴に加えて、その流通経路も含めた調査が必要である。1970年代初めの観察によるとヤオ族が飼育するブタは、すべて黒ブタで白色のものはみられないことがいわれている [量 1977:170]。近年タイ北部の山地民社会は大きく変化した。調査村においても1990年代に入ると焼畑が衰退し常畑化が進んでいる。このような社会変化の中で、飼育されているブタについても何らかの変化があった可能性がある。

ブタの飼育方法についてみると伝統的に営まれてきた粗放的なブタ飼育が続けられている地域がある一方で、例えば日本のように集約的な養豚業がおこなわれるようになってきている地域も多い。伝統的に営まれてきた粗放的なブタ飼育は、周囲の自然環境だけでなく飼育者の文化を反映したものである。これまでに東南アジアからオセアニアのブタ飼育に関して、オーストロネシア語族に分類される民族によるブタ飼育が大きく「ブタ+イモ」型、「ブタ+イモ+穀物」型、「ブタ+ウシ+イモ+穀物」型の3つの型に区分できることがいわれている [大林 1999:339 - 340]。しかし、シナ・チベット語族に分類されるヤオ族は、この大林の分析には含まれない。

これまでに1970年代初めの観察からタイ北部のヤオ族の村においてブタの飼料としてトウガン、カボチャ、野生バナナの茎を主として、これに米糠を加えたものを朝夕の2回給餌していたことが報告されている [量 1977:169]。さらにヤオ族の村ではブタ小屋が一般に利用されることが報告されている [常見 1977:200 - 202]。このような断片的な情報は見られるものの、ヤオ族に限らずタイ北部においてブタなどの家畜に焦点をあてた調査事例は極めて少ない。このためヤオ族のブタ飼育に関して、村落レベルでの戸別のブタ飼育の状況やその生殖管理の方法に関する報告は皆無である。

本報告では、タイ北部に位置するヤオ族の山村における、ブタの形態的な特徴とその入手方法そしてブタの育成およびその生殖管理について報告する。

## 2. 調査地と調査方法

### 1] 調査地

調査村は、タイ北部パヤオ県の標高約950mに位置するヤオ(ミエン)族の山村である。ヤオ族は19世紀以降に中国南部からタイへ移住してきたといわれる山岳少数民族で、一般に焼畑民として知られる。村は村立から少なくとも100年以上が経過している。調査村の2004年の人口は20戸に合計128名である。村では家畜としてブタとニワトリそしてイヌ\*1が飼育されている。村の周囲にはシイヤカシなどが混在する落葉混交林と竹林が広がり、野生のバナナが生育する。これらはいずれも二次林で、かつては焼畑として利用されていた場所も多い。

村民の生業は開村以来、山腹の傾斜地を利用した農業である。村では1970年代まではケシを盛んに栽培し、そこから採集されたアヘンを販売していた。このケシ栽培に加えて村民は焼畑によって自給用の陸稲や主にブタの餌として利用するためのトウモロコシを栽培していた。しかし政府によるケシ栽培への取り締まりによって、ケシ栽培は1980年代には徐々に衰退した。さらに1990年代以降、森林局による森林保全の取り組みによって、村民の土地利用が大幅に制限されると従来の焼畑は困難となり、現在は換金用のトウモロコシの連作がおこなわれている。また1990年代になるとバンコクとその周辺地域や外国へ出稼ぎに出る者も多くなっている [増野 2005]。

### 2] 調査方法

調査は筆者が村に住み込む形で行われた。2005年度は調査村に9ヶ月以上の村に滞在した。全戸を対象にしたブタの飼育状況に関する聞き取り調査は、2005年10月から11月にかけておこなった。この調査では筆者が各戸を訪問し、日常的にブタの世話に従事している者とともに、その家のブタを観察した。その際にブタ各個体について、そのブタの入手先、親子関係、性別、年齢、去勢済みかどうかを聞いた。

ブタの乳頭数に関する調査は2006年3月におこなった。この調査では筆者が村で雇用した調査助手(男性34才)とともに、性的にすでに成熟していると考えられる雌のブタ全個体を対象に、入念にその数を数えた。性的に成熟しているかどうかは調査助手の判断によった。

### 3. ブタの種類

まず初めに調査村で飼育されているブタの特徴について述べる．ここでは村のブタの形態的特徴およびそのブタの入手方法そして村人による黒ブタへの「こだわり」の順に説明する．

#### 1 ] 形態的特徴

村人によると、村のブタは村で長年飼育されてきたもので、新しい品種が導入されたという話は聞かれなかった．ブタは体色が黒色のブタ（以下黒ブタ）である（写真1）．村で飼育される黒ブタの中には、体の一部が白色の個体もある（写真2）．しかし調査村では体色が白色のブタ（以下白ブタ）はまったく飼育されていない．村で飼育されているブタは全て黒ブタである．ブタの耳の形状についてみると、耳が若干横に広がる個体がみられるものの、耳が垂れた個体はみられない．その一方でイノシシのような小型のすどく尖った形状の耳を持つ個体もみられない．ブタの乳頭数は、調査の対象となった全33頭の雌ブタのうち乳頭数が5対のものが25頭そして6対のものが8頭だった．このように乳頭数が5対のものが6対のものより多く個体間における乳頭数の変異の幅は小さい．

これらの形態的特徴は耳が垂れ下がった大耳型の中国系のブタや、乳頭数が10対近く見られるようなヨーロッパ系のブタとは全く異なるものである．調査村で飼育されているブタはこの地域の「在来種」といわれる小耳系のブタの特徴を残した黒ブタであるといえる．このような村の黒ブタはどのように入手されているのか、次にブタの入手方法について試みる．



写真1（2006年3月27日）  
村で飼育されている黒ブタ



写真2（2005年10月27日）  
村で飼育されている黒ブタ  
体の一部が白い個体

#### 2 ] ブタの入手方法

##### (1) ブタの入手先とその民族

村で飼育されるブタの入手先について表1にまとめた．村では雄105頭そして雌58頭の合計163頭のブタが飼育されていた．このブタのうち村内で入手されたブタは145頭である．一方で村外から入手されたブタは18頭である．村外から入手されたブタは村で飼育されているブタの約11%を占めるにすぎない．村内で入手された145頭のブタのうち、123頭は村内で各戸が自家繁殖させたものである．残りの22頭のブタは自家繁殖によらない方法で入手されたものである．調査村のブタは基本的に村での自家繁殖によって生産されている．

村外から入手された18頭のブタについて入手先の民族について試みると、15頭がヤオ族の村から、2頭がタイ族の村からそして残りの1頭がモン族の村から入手されたブタだった．このように村外から入手されたブタの大部分が、村民と同族であるヤオ族の村で入手されたものである．一方で数は少ないが他民族からブタを入手することがあることが指摘できる．

##### (2) ブタの入手方法

	村内	村外			合計
		ヤオ族の村	タイ族の村	モン族の村	
自家繁殖	123	-	-	-	123
購入	19	12	2	1	34
無償	2	2	-	-	4
交換	ブタ同士	1	-	-	1
	モノとブタ	-	1	-	1
合計	145	15	2	1	163

表1 調査村で飼育されているブタの入手先

出所：筆者が2005年10月から11月におこなった聞き取り調査

自家繁殖以外のブタの入手方法として、購入による入手、無償での入手そして交換による入手の3種類の方法が確認された。購入によって入手したブタが34頭であるのに対して、無償で入手したブタと交換によって入手したブタは、それぞれ4頭および2頭と極めて少ない。村において自家繁殖以外の最も一般的なブタの入手方法は購入によるものである。

まず購入によって入手されたブタ34頭についてみる。購入によって入手されたブタのうち19頭は村内で購入されたブタで、残りの15頭は村外から購入されたブタである。村内で購入されたブタの数と比較しても村外から購入されたブタは多い。村外からのブタの購入もブタを入手するための有力な手段の一つとなっている。

村外で入手されたブタは、村民と同族であるヤオ族から購入されたものが多い。しかし数は少ないものの、タイ族から2頭そしてモン族から1頭のブタが購入されている。このように村外から購入された黒ブタは、自家繁殖した黒ブタとまったく同じように扱われる。このことから村で飼育されている黒ブタは、調査村やヤオ族に特有の品種ではないことが指摘できる。さらに調査村において特に決まった系統や品種を維持しようという取り組みもみられない。

次に無償で入手されたブタについてみる。無償で入手されたブタは4頭である。このうちの2頭は両親が娘夫婦に与えたもので、残りの2頭は兄弟が弟妹に与えたものである。無償でのブタの取引は村内でも特に親族内のみで確認された。

最後に交換によって入手されたブタについてみる。交換によって入手されたブタは2頭である。このうちの1頭は村内でブタの雄と雌とを交換して雄を得たものである。もう1頭は約40リットルの糞と子ブタ1頭を交換したものである\*2。モノとブタの交換によるブタ入手はヤオ族同士でおこなわれたこの1例のみである。

### (3) 入手先の違いからみた各戸のブタ飼育状況

村で飼育されているブタの多くは各戸が自家繁殖によって生産したブタである(図1)。しかし家番号1番(以下1番と表記、他の家も同じ)と7番そして16番の家では、これと全く異なる傾向がみられた。これらの家において飼育されているブタは全て購入によって入手されたブタである。これらの家がブタの購入に至った状況について家毎にみる。

まず1番の場合、8頭の全てのブタを4番の家から購入している。1番の家の妻と4番の家の妻は姉妹であり、このブタの売買は親族間の取引だった。ブタを購入してきたのは1番が全てのブタを消費してしまったためである。

次に7番の場合、飼育している全部で6頭のブタは、3頭が村内で購入されたブタで、残りの3頭は村外で購入されたブタである。この村外で購入されたブタのうち1頭はヤオ族の村で、2頭はタイ族の村で購入されたものである。タイ族の村から購入したブタを飼育していたのは村内で7番のみである。この家では2005年に多数のブタを供犠として必要とする儀礼をおこないブタを消費してしまったため、購入によってブタを補充したものである。

最後に16番の場合、飼育しているブタは1頭のみである。16番は経済的に困窮している世帯である。本来はもっと多くのブタを飼育したいが、その経済的余裕がないという。少なくとも筆者が調査を開始した2003年

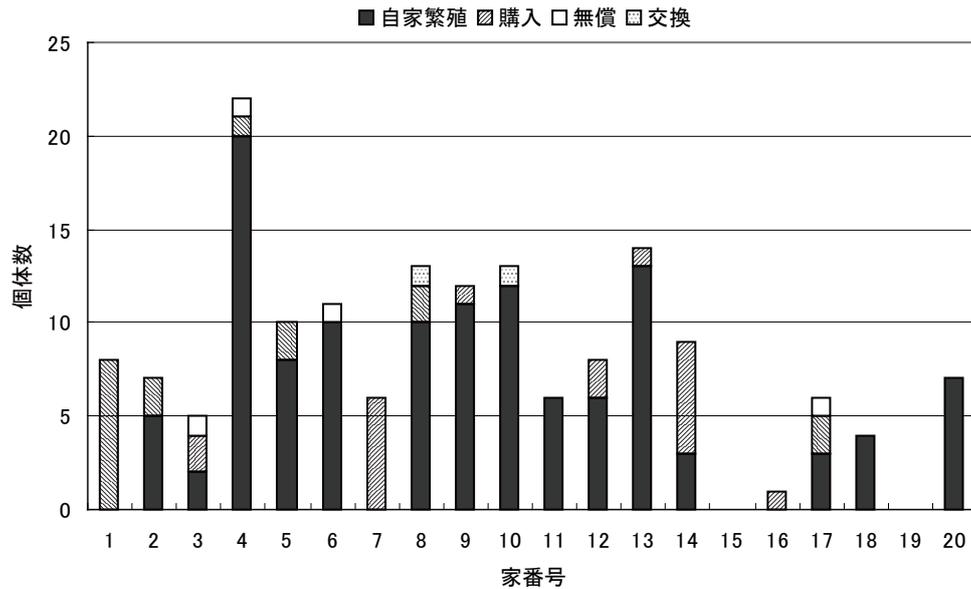


図1 入手先別にみた戸別のブタ飼育数

出所：筆者が 2005 年 10 月から 11 月におこなった聞き取り調査

10 月以降、2005 年 10 月までの間に、多数のブタを飼育していたことはない。2005 年 11 月は 16 番がブタの自家繁殖をするために、ちょうどブタを 4 番の家から購入してきたところだった\*<sup>3</sup>。

無償で入手されたブタと交換によって入手された 6 頭のブタについてみると、これらのブタは各家に分散しており、無償および交換によるブタの入手は、特定の家に特有の行為ではないと考えられる。

### 3 ] 黒ブタへのこだわり

ここまで村で飼育されているブタは全て黒ブタであることを述べた。村民は黒ブタを好んで飼育しているように見える。白ブタは筆者も低地の村や市場で見かけることがあったが、調査村において現在白ブタはまったく飼育されていない。ただし調査村においても、過去に白ブタが飼育されたことがある。ここでは聞き取りによって明らかになった村での白ブタ飼育の事例を紹介する。

事例 1 S 氏（1972 年生男性）は、バンコクでの出稼ぎを終えて帰村した 1999 年から 2002 年までの約 4 年間白ブタを飼育した。この白ブタの飼育は彼が自発的に始めたものである。S 氏は当時から農業を営んでおり白ブタ飼育は現金収入を得る手段の 1 つとして始めたものだった。

白ブタは S 氏がヤオ族の村であるドンラオ村で 45 日齢のブタを購入してきた。白ブタの飼育方法はドンラオ村に住む親戚の者から手ほどきを受けた。S 氏は白ブタの自家繁殖はおこなわず子ブタを 3 ヶ月から 4 ヶ月飼育してブタが大きくなるとこれを販売し新たな子ブタを購入し、これを繰り返すことで現金収入を得た。子ブタは安いときには 1 頭あたり 800 バーツ、高いときには 1200 バーツで購入した。ブタは 1 キロあたり 30 バーツで販売され、1 頭あたり約 2700 バーツで販売できた。

白ブタには餌として配合飼料を与えた。バナナの茎を食べさせるとブタが痩せてしまうので、バナナは利用できなかった。配合飼料代とブタを販売しにいくための車代を考慮すると労力の割には儲けは少なかった。

S 氏は白ブタを飼育していた 4 年間は黒ブタを飼育しなかった。白ブタは正月に供犠として 1 頭つぶしたことがあったが基本的に販売のみに用いられた。白ブタを供犠として利用しなかったのは普段の儀礼において大きな白ブタを利用するのはもったいない（赤字となる）からである。（出所：2006 年 5 月 12 日に筆者がおこなったインタビュー）

事例 1 からは S 氏が白ブタを自給目的ではなくて換金目的として導入したことがわかる。また白ブタの育成自

体には大きな問題はなかったと考えてよい。白ブタの飼育を断念したのは、白ブタ飼育が農業を主な生業としていたS氏にとって、白ブタの飼育が思いのほか重労働であったことが大きい。

村民になぜ白ブタの飼育をしないのかについて聞いたところ村民の意見は「脂肪の多い白ブタよりも黒ブタの方がおいしいから」ということで一致していた。黒ブタと白ブタの味について、調査村から約9キロメートル離れたタイ族の村にある雑貨店に併設された豚肉販売所でも聞いてみた。この村の販売所では毎日ブタを店の裏でつぶして、その肉を計り売りしている\*4。この店でブタ肉を計り売りしている女性（推定40代）は「この販売所では黒ブタと白ブタの両方のブタをつぶして販売しているが、味は黒ブタの方が白ブタよりもおいしい」と断言した（2006年3月筆者によるインタビュー）。黒ブタの方が白ブタよりも味が良いということは、調査村だけでなくこの地域で一般的な意見であると考えて良さそうである。

白ブタと黒ブタに関して、味のよし悪しの以外では、村民の1名から「白ブタは成長すると大きくなりすぎて、現在村で使っているようなブタ小屋では飼育しきれない」という意見が聞かれた。

ところでヤオ族は日常的にさまざまな儀礼をおこない、その際に供犠としてブタやニワトリを用いることが知られている。村民が黒ブタを飼育しているのは、儀礼において黒ブタが必要とされるからではないだろうか。ここでは筆者が観察した結婚式の事例から、供犠とブタの種類との関係について考えてみたい。

事例2 2006年3月14日に調査村で結婚式が催された。筆者もこの結婚式を参観することができた。夫はタイ中部のラオーン県出身のタイ族（いわゆるタイ人）で、妻が調査村出身のヤオ族の者だった。この日の結婚式はヤオ族の結婚の儀礼に乗っ取っておこなわれた。この結婚式では、夫がタイ族の村で購入してきた大型の白ブタが3頭と、妻の両親が調査村で飼育していた3頭の黒ブタの合計6頭のブタが供犠に利用された。そしてブタ肉は結婚式の参加者に料理としてふるまわれた。

この結婚式において白ブタを利用したことについて、儀礼をおこなった祭司は白ブタであってもブタであることには変わらないので儀礼に関して何の問題はないと述べた。

筆者がこれまでに調査村で白ブタが屠殺されるのを見たのはこの1事例のみである。筆者が村で観察した数々の儀礼において利用されたのは全て黒ブタだった。しかしこの事例から、供犠として利用するブタは必ずしも黒ブタである必要はないことが指摘できる。儀礼に用いられるブタが黒ブタのみだったのは、村民が飼育しているブタが黒ブタだったためであった可能性が高い。購入したブタについても、結婚式においてブタを購入してくることはよくあることで、このことは結婚式で利用するブタが自ら飼育したブタである必要はないことを意味している。

このようにヤオ族がおこなう儀礼と黒ブタの飼育との間には、直接的な関係はみいだせない。筆者が見る限りブタを供犠として利用する場合に重要なのは、ブタがその場で供犠とされること、そしてそのブタから共食に十分な肉が得られるかどうかの2点である。

#### 4. ブタの育成

ここでは村でのブタ飼育の現状について戸別のブタ飼育数および飼養方法そして生殖管理の方法について順に説明する。

##### 1] 戸別のブタ飼育数

調査村では20戸のうち18戸がブタを飼育している（図2）。ブタを飼育していない2戸（15番と19番）のうち19番では、この家の主人が他村に愛人を作り村に帰ってこなくなったために、19番のブタは主人の父親の家である20番が飼育するようになっている。このため村内でブタを飼育していないのは実質的には15番のみである。この家は村内で最も貧乏な家である。15番の主人はブタを飼育したいと考えてはいるが、飼育を始めるための金銭的な余裕が全くない状況である。

各戸のブタ飼育数についてみる。最も飼育数の多い4番は22頭のブタを飼育している。一方最も飼育数

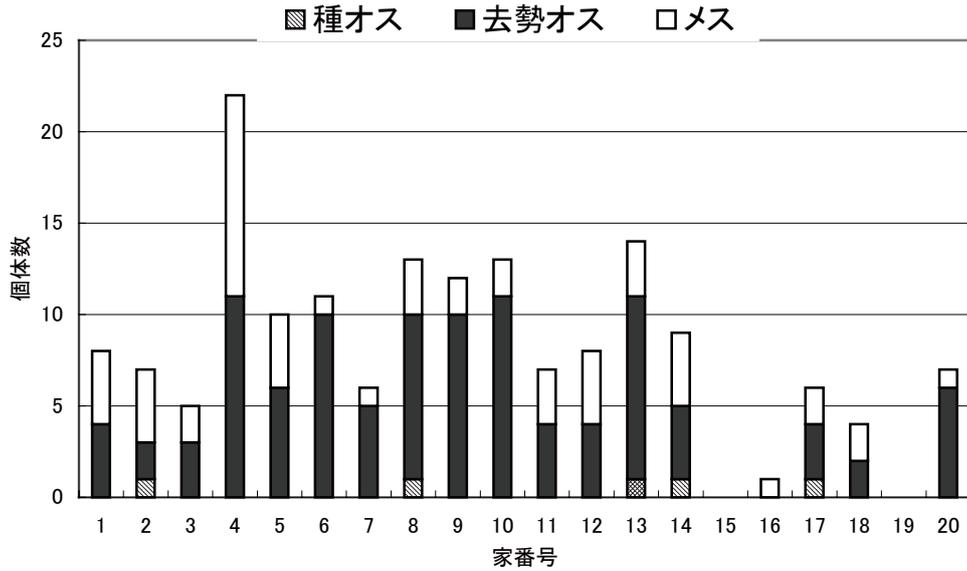


図2 ブタの雌雄および種オスの分布からみた戸別のブタ飼育数

出所：筆者が2005年10月から11月におこなった聞き取り調査

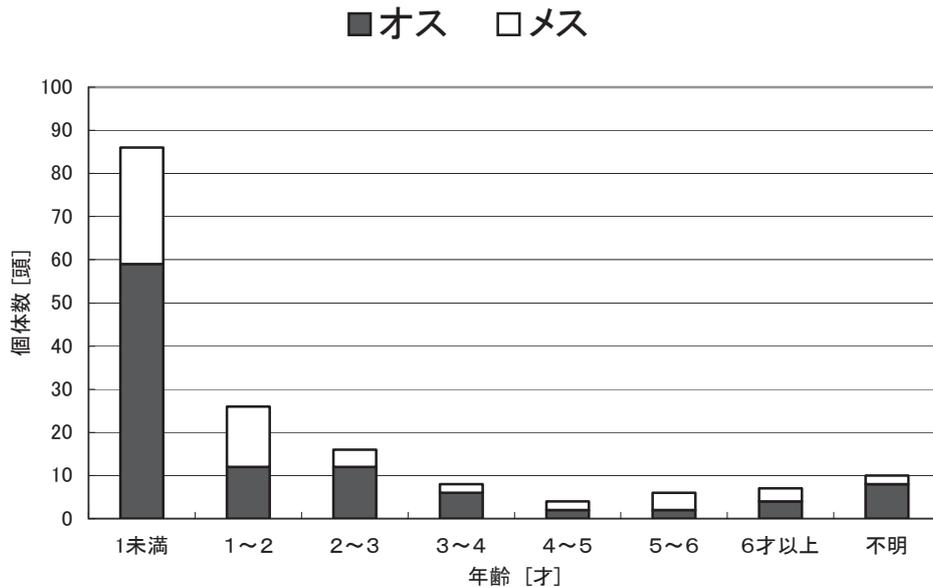


図3 村で飼育されるブタの齢構成

出所：筆者が2005年10月から11月におこなった聞き取り調査

の少ない16番が飼育しているブタは1頭のみである。そしてブタを飼育している18戸の飼育数の平均は9.1頭だった\*5。

村で飼育されているブタの齢構成を図3に示した。この齢構成をみてみると、1才未満のブタが多く、1才未満から2才未満へと年齢が上がるところで飼育個体数が急激に減少していることがわかる。村のブタの最高齢は8才の雌だった。4歳以上にも雄ブタがみられる。これらの雄ブタは、いずれも去勢されており種ブタではない。

次に各戸が飼育しているブタの性比のうちわけをみてみる。多くの家が雌ブタを複数頭飼育しているが、6番、7番、16番そして20番のように、雌ブタを1頭のみしか飼育していない家があることがわかる。この4戸に加えて8番、9番そして10番もメスの数がオスに比べて相対的に少なくない。調査村では母ブタを少数残して去勢オスを中心にブタの飼養戦略がみられることが指摘できる。このような飼養方法について6番の主人の妻

は「メスを飼育していて子ブタが産まれ過ぎても飼育しきれない。オスだけならば子ブタは生まれない」と述べた。調査村ではブタを増殖させることは容易なことであり、去勢オスの利用によっていかにブタの繁殖を抑制するかが重要であると認識されている。

## 2 ] ブタ小屋

調査村では家畜小屋が家屋とは別に建てられている。村では家畜小屋としてブタ小屋とニワトリ小屋がみられる。これらの家畜小屋は、家屋から斜面下部にあたる北側に建てられている。ブタはこのブタ小屋で舎飼いされる。ブタ小屋を持っているのは、ブタを飼育している18戸のうちの16戸である。ブタ小屋を持たない2戸(16番と18番)ではブタの飼育数が少ないため、ブタ小屋ではなく簡素なブタ用の檻を作り、その中でブタを飼育している。

ブタ小屋は木造で高床式である。小屋の屋根材にはトタンが用いられている(写真3)。ブタ小屋に利用されている木材は村の周辺の森から切り出したものを荒く挽いたものである。小屋によっては小屋の柵にあたる側面部分にタケを利用しているものもみられる。ブタ小屋の床板と床板の間には隙間があり、ブタの糞尿は自然に床下へ落下するようになっている。村民はこのブタの糞尿が畑の肥料として利用できるということを知っているが、現在この糞尿を利用している様子はない。小屋側面の柵は子ブタが自由に出入りできる程度に隙間が空けられている。

ブタ小屋は柵によって小部屋に区分されている。去勢していない雄ブタは単独で柵で隔離されて飼育される。去勢の済んだ雄ブタは雌ブタと同じ小部屋で飼育される。また小さなブタは複数頭で1つの小部屋で飼育されているのに対し、大きなブタは単独で飼育される。これは単純にブタの大きさと部屋の大きさを考慮した結果のようだ。

## 3 ] 飼料

ブタの給餌は朝と夕の2回おこなわれる。ブタには餌として米ぬかとバナナの茎を刻んだものを混ぜ合わせたものが利用される。米ぬかは町の精米所で購入してきたものである。村で精米していたときには、米ぬかは村で手に入れることができたという。この野生バナナと米ぬかを混ぜ合わせたものにトウモロコシを加えて豚の餌とすることが多い。

### (1) 野生バナナ

野生バナナは村の周辺に無数に生育しているのでこれをブタの餌に利用する。村民はバナナを畑作業から帰る途中などに伐採し、上部の葉を切り取って茎の部分のみを持ち帰る。持ち帰ったバナナの茎はブタに与える前にナタを使って細かくきざまれる。この作業は主に朝方におこなわれる。村の敷地内や畑には食用バナナも植栽されている。しかし野生バナナが豊富に利用できるため、食用バナナはバナナの実が収穫されるまでは、これをわざわざブタの餌に利用することはない。

### (2) トウモロコシ

トウモロコシは換金用に栽培される高収量品種がブタの餌にも流用されている。このような高収量品種のトウモロコシが導入される以前には、ヤオ語で白いトウモロコシを意味する「メッ・ペツ」と呼ばれる、実が腕の太さほどにもなるトウモロコシが栽培されていた。しかしこのトウモロコシは、現在村では全く栽培されておらず、その種子も保存されていない。乾燥して堅くなったトウモロコシの実は、そのままでは餌としての利用に適さない。このためトウモロコシは挽いて粉状にするか、そうでなければ鍋で煮てからブタに与えられる。トウモロコシを粉に挽く作業には機械を用いることが多いが、石臼もいまだに現役である。トウモロコシを粉にする機械を使うためには、その使用料を支払う必要がある。このため粉に挽くトウモロコシの量が少ないときには石臼が利用される。



写真3 (2005年10月27日)  
高床式のブタ小屋  
屋根はトタンが利用されている

### (3) その他の餌

配合飼料はブタが若い時期とブタを短期間で太らせる必要がある場合(例えば結婚式がひかえている場合など)に用いることがある。調査村ではブタの配合飼料は、毎日のブタの餌として利用されるものではない。この他にブタの餌として、カジノキの葉やサツマイモの蔓と葉などが利用されることもある。このサツマイモは村民がおやつ程度に食用とするのみでブタの餌としては利用されない。

### 4] 生殖管理

ここでは村でおこなわれている去勢ブタを利用したブタの生殖管理について説明する。村で飼育されている105頭の雄ブタのうち、未去勢のブタは5頭のみで、その他の100頭の雄ブタは全て去勢済みだった。未去勢ブタは村の18戸のうち5戸がそれぞれ1頭ずつ飼育している。調査時には5頭の未去勢ブタのうち3頭はまだ幼かったため、種ブタとして利用可能なのは2頭のみだった。このように調査村において雄ブタはほぼ全て去勢されている。

#### (1) 雄ブタを去勢する理由

雄ブタを去勢する理由として村民は「去勢をしていない雄ブタは肉が臭くて食べることができない」ことを挙げた。これ以外の理由として村民から「去勢をしないと雄ブタが太らない(脂がのらない)し大きくなならない」という意見が聞かれた。さらに「去勢をするとブタの気性が穏やかになる」と言う者がいた。「去勢をしない場合、オスが繁殖期のメスを求めて檻を抜け出してしまい飼育できない」という意見もこれと同様のことを意味していると考えてよいだろう。

このようなことから雄ブタを去勢する理由は第1にブタを美味しくするため、第2に雄ブタを大きく育てるため、そして第3に、ブタの性状を穏やかにするためである。

雄ブタの去勢は、ブタを販売する際にも必要である。購入によって入手された36頭のブタのうち20頭が雄ブタである。この雄ブタのうち村内で購入された9頭の雄ブタは全て購入時にすでに去勢されていた。村外から購入された9頭のうち6頭が去勢済みで、残りの3頭が未去勢のまま購入された。後者のうちの1頭は購入後に去勢されたが、2頭は未去勢のまま飼育されている。おそらくこの2頭は種ブタとして利用することを想定して購入された雄ブタである。このように雄ブタの去勢は基本的に販売前に処置されるべきものである。

#### (2) 雄ブタの去勢方法

雄ブタの去勢方法には、ブタがまだ幼いうちに処置する方法と、ブタが大きくなってから処置する方法の2種類ある。前夜の方法で去勢する雄ブタは、生後約1ヶ月までが望ましいとされている。これはブタが大きくなると、人の手に負えなくなってしまうからである。後者は種ブタとして利用されていたブタを去勢するものである。この方法は日常におこなわれるものではないので筆者は未見である。ここでは前者のブタがまだ幼いうちに処置する去勢の方法について説明する。

去勢に使う道具



写真4(2005年8月23日)  
ブタの去勢の様子



写真5(2005年8月23日)  
ブタの去勢の様子  
肛門付近をカミソリで切開し、辜丸を摘出している

去勢はカミソリを使って外科的に丸を摘出する方法でおこなわれる。去勢を実施する際に用意するものは、ブタを入れる袋、カミソリ、ヨードチンキなどの消毒薬そして粉末のアスピリンである。

袋は肥料袋が利用されている。カミソリは新しい刃が用意される。去勢の施術者によって大きな違いがあったのが消毒薬である。消毒薬はかまどの上にとまった“すす”と塩を水で溶いたものを利用する者、家の裏で採集した赤土を利用する者などさまざまである。アスピリンは術後に患部の鎮痛剤として利用される。

去勢の手順

去勢をするためには子ブタを捕獲する必要がある。去勢の作業の中でこの作業が最も困難である。子ブタは家族数人が手づかみで捕まえる。捕まえた子ブタは袋に入れておく。

去勢は二名でおこなう。二人が向かい合って腰をおろし、一方が子ブタの後脚をつかんで、子ブタの睾丸がある肛門のあたりが見えるように固定する。もう一方の者は、カミソリを持ち、睾丸がある場所を切開し、睾丸を片方ずつ摘出する(写真4, 写真5)。両方の睾丸を摘出すると患部にはアスピリンの粉末をふりかけ、消毒薬を塗って作業が終了する。左右あわせて2ヶ所の2センチほどの切開部が開いたままであるが、患部の縫合はおこなわない。1頭あたりの施術に1分もかからない。

摘出した睾丸は、全てまとめて土に埋める。睾丸をブタ小屋近くの地面に埋める人もいる。このするとブタが健やかに育つとのことである。

去勢技術の習得

村内でこのようなブタの去勢技術を持つ者は19名である。このうち8名が女性である。去勢技術を持つ者の年齢は20代から70代まで幅広い。このことから去勢技術は世代を越えて男女に関わらず維持されている技術といえる。彼らはいずれも両親や村内の者が去勢をしている現場を見て、自然に去勢技術を習得したのだという。

(3) 村内での種ブタの借用関係

種ブタとして利用される未去勢オスは脂肪がなく痩せており体毛につやがなく、他の去勢ブタや雌ブタと比べて明らかに異なる風貌をしている。村内では種ブタが5戸の家で1頭ずつ合計5頭飼育している。このように種ブタは各戸が飼育しているものではない。

種ブタを飼育していない家ではブタを繁殖させたいときには、種ブタを飼育している家から種ブタを借りてきてブタを交尾させる。このときの種ブタの使用料は無料である。このような村内の種ブタの貸借関係を図4に示

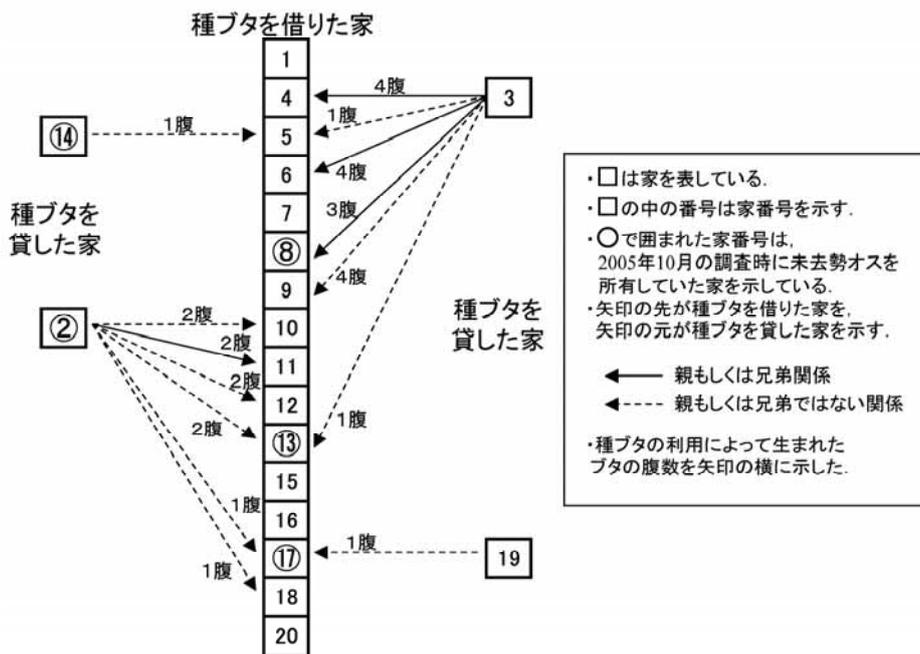


図4 村内における種ブタの貸借関係

出所：筆者が2005年10月から11月におこなった聞き取り調査

した．種ブタを供給した家が4戸みられる．そして11戸がこの種ブタを借りてブタを繁殖させていることがわかる．種ブタを貸し出している家で、種ブタを借りている家はみられない．3番の種ブタによって他の家で生まれたブタは18腹、2番の種ブタによって他の家で生まれたブタは10腹、14番と19番の種ブタを利用して他の家に生まれたブタはそれぞれ1腹ずつである．このように2番と3番が飼育する種ブタが、村内のブタ生産に大きな役割を果たしたことがわかる．

村内における種ブタの分布をみると2番と14番は、現在も種ブタを所有しているが、3番と19番は未去勢オスをすでに所有していなかった．とくに3番の家では、ちょうど筆者が調査を始める直前の2005年10月初めに種ブタを去勢してしまっていた．

ブタを借りた11戸のうち8戸がひとつの家から種ブタを借りている．このように種ブタの貸借は、誰に対してもおこなわれるわけではなく、各家に得意とする家の結びつきがみられる．ここで貸借関係における親族関係をみてみると、ブタの貸借は親族間のみではなく、親族ではない関係においても積極的におこなわれていることがわかる．

複数の家から種ブタを借りていたのは、5番、13番そして17番の3戸である．13番は種ブタの主要な供給源である2番と3番の両方から種ブタを借りている．これらはいずれも親族ではない関係での種ブタの貸借である．

このように種ブタの貸借をめぐる家同士の結びつきは親族関係のみでは説明のできないものである．

## 5．まとめ

### 1] ブタの種類

調査村で飼育されているブタは体色が黒色であること、耳の形状がすどく尖ってはいないが垂れていないこと、乳頭数が5対もしくは6対と少ないことから、この地域の「在来種」と考えられる小耳系のブタの特徴を残した黒ブタである．この黒ブタは基本的には村内での自家繁殖によって生産される．この黒ブタは他民族から購入されることもあることもあり、特に調査村やヤオ族の間に特有の品種が維持されているものではない．

村民が白ブタではなく黒ブタの飼育を続けている理由として、黒ブタの方が白ブタよりも味がよいことが挙げられた．また白ブタも儀礼に用いることが可能であることから、儀礼に用いるために黒ブタが飼育されているわけではないことが明らかになった．

2005年に調査村で飼育されているのは黒ブタのみだった．これは1970年代の北タイでの観察事例に合致するものである．しかし調査村では1999年から約4年間に渡り白ブタの飼育がおこなわれており、村では黒ブタに限定されないブタ飼育の試みおこなわれていることが指摘できる．

### 2] ブタの育成

調査村では20戸のうち18戸が合計で163頭のブタを飼育している．このブタの年齢構成をみてみると1才未満から2才未満へと年齢が上がるところで飼育個体数が急激に減少していることから、ブタは1才までの間に消費や販売されてしまうことが推測される．

調査村では7戸が少数の母ブタを残して、多数の去勢オスの飼育をおこなう飼育戦略をとっている．調査村ではブタを増殖させることは容易なことであり、去勢オスの利用によっていかにブタの繁殖を抑制するかが重要であると認識されている．

ブタはブタ小屋の中で舎飼いされている．ブタの餌として主に米ぬかとバナナの茎を刻んだものを混ぜ合わせたものが利用され、配合飼料は基本的には利用されていない．このようなブタの飼育方法は1970年代の観察事例と同じものである．しかし米ぬかが購入されるようになっている点や換金用の高収量品種のトウモロコシがブタの餌にも利用されるようになっている点など細かな点では変化も起きている．

### 3] 生殖管理

村で飼育されている雄ブタ105頭のうち未去勢のブタは5頭のみで、その他の100頭のオア雄ブタは去勢済

みだった。ブタの生殖は種ブタとして利用されるごく少数の未去勢の雄ブタを残し、その他の雄ブタを全て去勢することで管理されている。

ブタの去勢はブタの生後約1ヶ月をめやすに実施される。去勢は外科的に子ブタの睾丸をカミソリを用いて摘出する方法でおこなわれる。このような去勢技術は村の生活の中で自然に習得されている。村では19名がブタの去勢技術を持っており、このうち9名が女性であった。

種ブタは各戸が飼育しているのではない。このため種ブタを飼育していない家は、種ブタを他の家から借りてくることでブタの繁殖をおこなっている。このような種ブタの貸し出しは無償でおこなわれる。村内における種ブタの賃借関係をみると、ブタの賃借は親兄弟といった親族関係に限らずおこなわれていること、種ブタを飼育している家は他の家から種ブタを借りて繁殖させた事例がみられないことが明らかになった。

#### 注

\* 1 イヌは主に猟犬として用いられ、食べることを目的に飼育されているのではない。

ニワトリはブタと同様に供犠および食用に盛んに飼育されている。

\* 2 2005年には村内で米約20リットルは100バーツ(300円)に換算されている。

\* 3 その後このブタは、2006年2月に催されたこの家の結婚式で消費された。

\* 4 調査村の村民も日常的な食事で食べる豚肉はこの雑貨店で購入したブタ肉を使っている。この店は調査村の村民にとってなじみの店である。

\* 5 ただしここに示したブタの飼育数には子ブタも含んでいる。例えば4番で飼育されている22頭のブタのうち、13頭は調査時に生後2週間未満の生まれたばかりの子ブタだった。

#### 引用文献

大林太良 1999 「オーストロネシア語族と豚の民族学」『オーストロネシアの民族生物学』東京：平凡社。339 - 357 頁

黒澤弥悦 2001 「イノシシとブタ - 人とのかわりを通して」高橋春成編『イノシシと人間 - 共に生きる』古今書院。2 - 44 頁。

常見純一 1977 「ヤオ族の住居と附属小屋」白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌 - ヤオとその隣接諸種族 - 』講談社、192 - 205 頁。

量博満 1977 「経済生活」白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌 - ヤオとその隣接諸種族 - 』講談社、161 - 191 頁。

増野高司 2005 「焼畑から常畑へ - タイ北部の山地民 - 」池谷和信編『熱帯アジアの森の民 - 資源利用の環境人類学 - 』人文書院、149 - 178 頁。

#### Abstract

This study aims to show pig husbandry at the Yao hillside village, Northern Thailand. The results are as follows.

The villagers still continue to breed black native pig in the village. But this native pig is very popular in my study area. So this pig is not Yao own variety. The villager tried to breed white domestic pig from the year 1999 to 2002. But there are no white domestic pigs in the village.

The 18 households out of 20 households breed 163 native pigs in the village. Villagers use rice bran, ground maize and minced stem of wild banana tree as feed of their pigs. They usually do not use formula feed.

The 100 male pigs out of 105 were castrated already in the village. The villagers employ male pig castration as reproductive control technique of their pigs. The 19 villagers including 9 female villagers have skill to castrate male pigs. The 15 households out of 20 households do not have own bore. Therefore the villagers

who do not have own bore must borrow bore from other household.